

アブラツノザメ 日本周辺

North Pacific Spiny Dogfish, *Squalus suckleyi*



管理・関係機関

なし

最近一年間の動き

2012年の我が国周辺のアブラツノザメの推定漁獲量は3,400トンであり、近年の漁獲量は横ばい傾向で推移している。沖合底びき網漁業（以下、沖底）及び底はえ縄の標準化CPUEは近年増加傾向にあり、アブラツノザメの主分布域である津軽海峡周辺では資源の増加傾向が認められる。

- 生物学的特性**
- 寿命：60歳以上
 - 成熟開始年齢：雌 23歳、雄 14歳
 - 繁殖期・繁殖場：2～5月、繁殖場は調査中
 - 索餌期・索餌場：調査中
 - 食性：魚類、頭足類
 - 捕食者：東北地方太平洋岸沖のマダラの胃内容物として出現

利用・用途

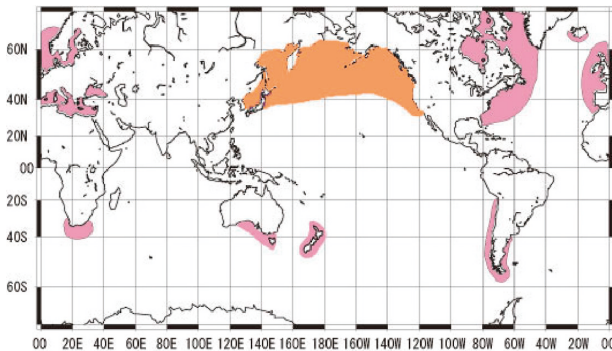
第2次世界大戦前後は、ビタミンA、肝油の原料としてかなりの需要があったが、合成ビタミンAの普及によりアブラツノザメ漁業は衰退した。東北地方では刺身や煮物、照り焼きなどで食されるほか、ちくわ等の練り製品原料として利用される。また、近年、肝油やサメ軟骨エキスなど健康補助食品の原料の一つになっている。

漁業の特徴

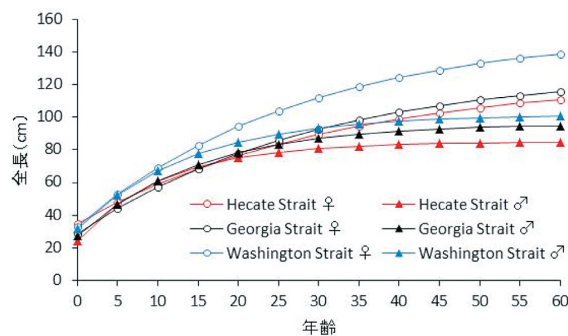
北日本の太平洋側や日本海側では、かなり古い時代から漁獲されていたが、漁獲対象として注目されるようになったのは明治30年代末頃からであり、北海道、青森、秋田、石川県などで当初はマダラなどを対象とした底はえ縄漁船の兼業対象種として漁獲された。その後、昭和初期に機船底びき網で漁獲されるようになった。太平洋戦争後は食糧増産政策に伴い主に機船底びき網により積極的に漁獲され、漁獲量が増加した。その後、漁獲量は減少したが、1990年以降は2,900～4,600トンと比較的安定しており、2012年まで横ばい傾向で推移している。その後、本種の漁獲努力量と漁獲量は、1950～1960年代の合成ビタミンAの普及による国際取引の減少とそれに伴う魚種単価の下落により急激に減少した。現在、本種の主な漁獲は、以前に比べて同種を主対象とした操業が減少した沖底と本種を漁獲対象とする底はえ縄漁業により行われている。さめ類全体の漁獲量より推定した本種の漁獲量は1990年以降2,900～4,600トンで比較的安定して推移している。このように、1950年代まではビタミンAの原材料として肝油を得るためにかなり積極的に本種が漁獲されてきたが、その後、合成ビタミンAの普及、価格低下などにより需要は大きく減少したと考えられ、アブラツノザメ漁獲量の増減は努力量の質的变化や操業パターンの変化によるものと思われる。近年の本種の漁獲は、アブラツノザメを漁獲対象として一部地域で行われている小規模漁業によるところが大きい。

漁業資源の動向

資源密度の指標値として、1972年以降の沖底漁獲成績報告書から集計した太平洋北区のかけまわし（1そうびき沖底）のCPUEと、主要な漁場である津軽海峡周辺における1979年以降の青森県の底はえ縄による漁獲量及び延べ操業隻数から求めたCPUEを用い、資源の動向を検討した。太平洋北区においてアブラツノザメの漁獲が多いのは襟裳西～尻屋崎海区で操業する青森県のかけまわしである。近年のかけまわしによるCPUEは1990年代後半の約120%程度、分布域の中心にある津軽海峡内の底はえ縄でも近年のCPUEが1990年代後半の約120%の水準を示しており、本資源が2000年代中期から明確な回復傾向にあると考えられる。さらに、底はえ縄の1979～2012年のノミナルCPUE（標準化されていないCPUE）は、1954～1956年に比べて高い水準にある。



アブラツノザメ類の分布（阿部 1986 を改変）
オレンジ色：Squalus suckleyi、ピンク色：S. acanthias



カナダ西岸のアブラツノザメの雌雄別年齢-全長関係 (Ketchen 1975より作成)

資源状態

本種を対象に主漁場の津軽海峡で操業する青森県の底はえ縄漁業のCPUE及び太平洋北区のかけまわしのCPUEから、本資源は悪い状態にあるとはいえ、現在の漁獲量水準は持続可能であると判断される。2004年以降は増加傾向にあると判断される。

管理方策

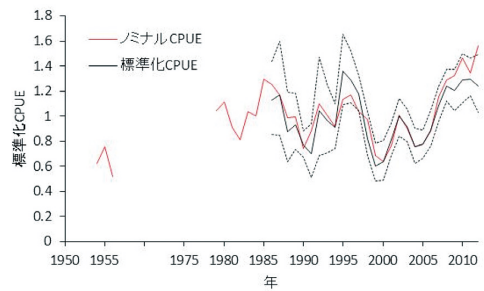
本種の資源状態は近年悪い水準ではなく、漁獲量は持続可能であると判断されるが、信頼性の高い資源評価結果を得るまでは漁獲努力量を現在よりも増加させるべきではない。漁獲量が比較的多い青森県三厩の底はえ縄漁業者は、小型魚や高齢魚を再放流しており、さらに、漁獲量の上限を設定するなど、資源保全に向けた取り組みを行っている。なお、2010年のワシントン条約第15回締約国会議において、スウェーデンから附属書Ⅱへの掲載が提案されたが採択されず、第16回締約国会議へ向けた掲載提案も行われなかった。

資源評価まとめ

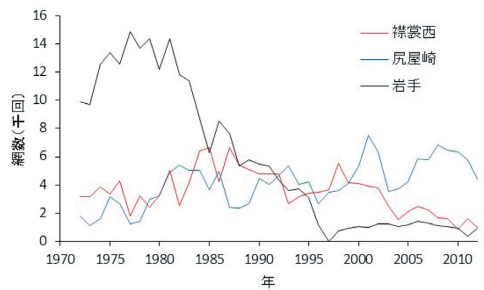
- 漁獲量は1950年代に比べ大きく減少している。
- 需要の減少が漁獲量減少の要因の一つと考えられる。
- 1990年以降の漁獲量は比較的安定しており、横ばい傾向で推移。
- 近年の沖底及び底はえ縄のCPUEは増加傾向。
- 資源は悪い状態にあるとはいえ、現在の漁獲量水準は持続可能。

資源管理方策まとめ

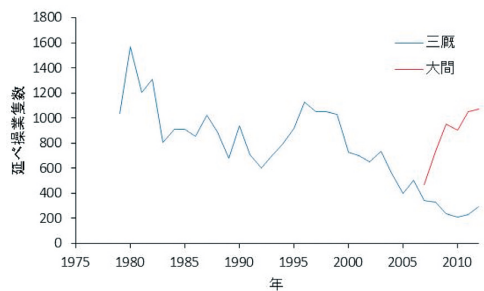
- 漁獲努力量を現在よりも増加させない。
- 底はえ縄漁業者により、資源保全に向けた取り組みが行われている。



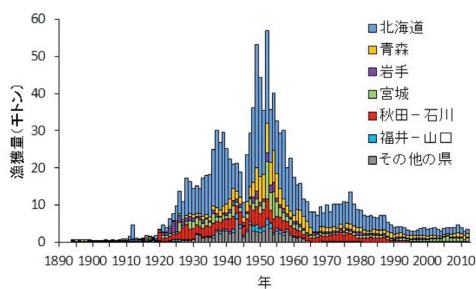
津軽海峡内で操業を行う底はえ縄のノミナル CPUE (標準化されていない CPUE) と標準化 CPUE (各 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線は 95% 信頼区間の上限値と下限値)



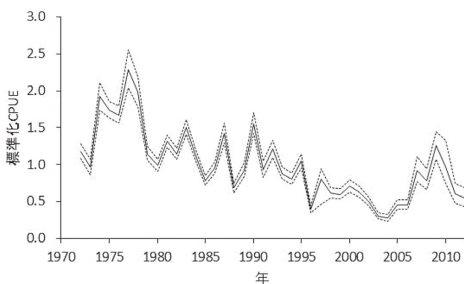
太平洋北区における沖底(かけまわし漁法)の有漁網数(アブラツノザメが漁獲された操業日の網数)の推移



青森県主要港(三厩及び大間)における底はえ縄によるアブラツノザメの延べ操業隻数



さめ類漁獲量から推定したアブラツノザメの漁獲量



太平洋北区における沖底(かけまわし漁法)の標準化 CPUE (標準化 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線は 95% 信頼区間の上限値と下限値)

アブラツノザメ(日本周辺)の資源の現況(要約表)

資源水準	悪い水準ではない
資源動向	増加(近年の漁獲量は持続可能)
世界の漁獲量(最近5年間)	2,905~4,576トン※ 平均:3,735トン(2008~2012年)

※漁獲量は全国のさめ類漁獲量と過去のさめ類に占めるアブラツノザメの平均的な割合から推定した値(2012年は暫定値)